

「愛の実践」

ローマ 12:9-21

【1】序

今日は「愛の実践」がテーマである。12:1-2 でパウロは真の礼拝について、「私たちの体を生きたささげ物として献げよ」と命じている。このことは、ローマ書1章から12章までに書かれている神の恵みに基づいてなされた命令である。キリスト者にとって神を信じて従うということは、いつも神の恵みが先行している。

9節からは恵みの賜物を与えられて生きる信仰者の姿が描かれていく。ここでは抽象的な愛の概念が教えられているのではなく、愛の実践について具体的な指示が与えられている。

【2】愛の実践

9節以降は2節の実践的適用である。ここに貫かれていることは9節に示される愛である。そして、この愛に基づいて10節からは具体的な指示がなされる。ここに述べられていることは、積極的な善を行っていくことについてである。それはこれまでの生き方が変えられた新しい生き方である。

この実践的な愛は、私たちが平穏で余裕がある中でなされるようなことではない。ここには、迫害下にあるキリスト者が前提となっている。このような迫害の中にあってもどのように生きるのが勧められているのである。この実践的愛の勧めは14節を頂点にして主イエスの愛に私たちの心向けさせながら勧められているのである。

【3】偽りのない愛

「愛には偽りがあってはなりません。」これは、9節から21節までの全体の

タイトルである。このテーマは、古い自分では不可能であったことである。これは、「心を新たにすることで、自分を変えていただく」ことの現れでもある。私たちは自分の思索、考え、行動において新しい基準を持って生きるのである。そして、失敗しても継続して訓練されていくのである。

その基準とは「アガペーの愛」である。この愛は最も純粋で確かなものである。それは善に満ち、悪が入り込むすきのない愛である。

「偽りが無い」とは、表面的なものとならないということである。偽善ではなく心からの真実のものであれ、というのである。では、どのようにしてこのような真実な愛を持つことができるのか。それは、先行している神の愛により頼むことによってである。神に目を留め、愛を覚え、応答するとき、私たちは互いに愛し合う者とされていくのである。

【4】悪を憎み善から離れない

このアガペーの愛は悪を憎み、善から離れることがない。この両者は愛のあり方として表裏一体である。

愛はヒューマニズムのような、何でも包み込んでしまうといった曖昧なものではない。しっかりとした方向性がある。それは、神の正しさに由来する。もし悪を曖昧にして憎まないならば、本当の愛を持つことはできない。しかし、これはまず自分自身の自己吟味から始まるのである。

このような愛を要求している命令は、実は神に倣う者になれという命令でもある。永遠の愛をもって愛してくださる神の事実に目を留めて、この神の愛に心から感謝するのである。ここから真実の愛の実践が始まるのだ。